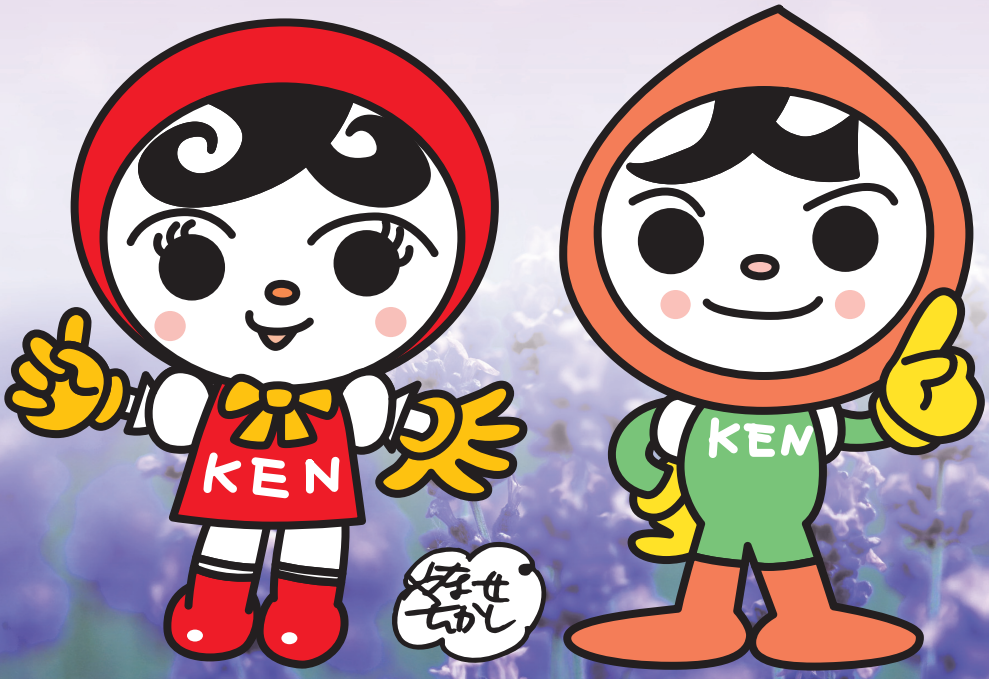
令和五年度

中学生人権作文集

（第42回全国中学生人権作文コンテスト静岡県大会）



人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

人権イメージキャラクター
人KENまもる君

静岡地方法務局
静岡県人権擁護委員連合会

法務省人権擁護局長
全国人権擁護委員連合会会長　感謝状贈呈校

平成三十年度

下田市立稲梓中学校
静岡市清水第四中学校
浜松市竜ヶ中学校
浜松市久間中学校
浜松市佐清中学校
伊豆の国市立立中学校
川根本町第二中学校
沼津市立池中学校
沼津市立中川根中学校
三島市立長岡中学校
熱海市第一中学校
御殿場市立熱海高校
伊豆市立中学校
清水町立中学校
土肥中学校
裾野市立貫校
長泉町立
北清中学校
富士市立富士中学校
富士宮市立中学校
下田市立鷹岡中学校
下田市立富士中学校
稲田中学校
稲取中学校
東伊豆町立中学校
東伊豆町立熱川中学校
河津町立河津中学校
南伊豆町立南伊豆中学校
松崎町立松崎中学校
西伊豆町立西伊豆中学校
西伊豆町立中学校
開誠館中学校
浜松市立浜松伊豆中学校
浜松市立浜松中学校
浜松市立浜松進学校
浜松市立浜松中学校
浜松市立浜松西学校
浜松市立篠原中学校
浜松市立三方原中学校
浜松市立細江中学校
三島市立三日中学校
磐田市立磐田中学校

令和元年度

浜松市立麁玉中学校
浜松市立春野中学校
湖西市立白須賀中学校
浜松日体中学校

中央大会推薦による同感謝状贈呈校

平成三十年度　浜松市立湖東中学校
令和元年度　静岡大学教育学部附属浜松中学校
静岡大学教育学部附属島田中学校
令和三年度　浜松市立北部中学校
長泉町立長泉中学校
令和四年度　三島市立中郷西中学校
静岡県立浜松西高等学校中等部
令和五年度　焼津市立小川中学校
浜松市立高台中学校

※　法務省人権擁護局長・全国人権擁委員連合会会長感謝状は、作文コンテストに多数の応募をいただいた中学校及び中央大会へ推薦された代表作品の応募者が在学する中学校などに対して、中央大会の主催者から贈呈しているものです。
〈過去5大会について掲載しています。〉

令和三年度

磐田市立磐田中学校
湖西市立西中学校
浜松市立伊佐栄中学校
浜松市立岡崎中学校
浜松市立明神中学校
浜松市立東中学校
浜松市立川中学校
大須賀中学校
大城川中学校
菊川市立須賀中学校
掛川市立西中学校
掛川市立第一中学校
掛川市立益中学校
掛川市立田中学校
掛川市立菊中学校
焼津市立東中学校
島田市立島田中学校
島田市立金谷中学校
伊豆東市立中学校
伊豆中門中学校
伊豆市立伊野中学校
伊豆市立天城中学校
清水町立大仁中学校
浜松市立水窪中学校
浜松市立南部中学校
浜松市立中南学校
浜松市立市南中学校
浜松市立踏切中学校
浜松市立雄踏中学校
浜松市立北星中学校
浜松市立引佐中学校
浜松市立蜆塚中学校
浜松市立北部中学校
浜松市立曳馬中学校
浜松市立佐鳴中学校
聖隷クリストファー中学校
森町立森中学校
静岡市立蒲原中学校
焼津市立小川榛原中学校
牧之原市立中学校
沼津市立金岡中学校
富士宮市立小山中学校
富士宮市立上野中学校
函南町立北伊豆中学校
浜松市立西遠南中学校
浜松市立新津中学校
浜松市立江南中学校
浜松市立函南中学校

令和四年度

令和五年度

第四十二回

全国中学生人権作文コンテスト

静岡県大会入賞作文集

静岡地方法務局
静岡県人権擁護委員連合会

はしがき

基本的人権とは、だれもが幸福な生活を送るために一人一人が生まれたときから平等に持っている大切な権利です。そして、この人権が守られ、尊重される社会をつくるためには、国民一人一人が、人権とは何か、人権の尊重とはどういうことかということを真剣に考え、日常生活の中で、それを不断に実行していく努力をしなければなりません。

法務省と全国人権擁護委員連合会では、人権尊重思想の普及高揚を図るために様々な啓発活動を行っており、その一環として昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施し、本年度で四十二回目を迎えました。この作文コンテストは、次代を担う中学生に人権問題について作文を書いてもらうことによって、人権尊重の重要性、必要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的として実施しているものです。

静岡地方法務局と静岡県人権擁護委員連合会では、毎年、同作文コンテストの静岡県大会を実施しています。本年度は、県内の中学校一六七校から七、五五五編に上る作品が寄せられました。その内容は、いじめ問題を中心とした子どもの人権問題に関するもの、ＬＧＢＴＱに関するもの、障害のある人・高齢者・外国人に関するもの及び戦争や平和に関するものが多くありました。御応募いただいたいずれの作品も人権問題を正面から受け止め、それらを中学生の純粋な目で観察し、自分はどうあるべきかを力強く語っているものばかりでした。

学校の勉強や部活動等で多忙な日々の中にありながら「人権」の大切さに思いをめぐらせて御応募いただいた中学生の皆さんに深く感謝いたします。

この作文集は、静岡県大会に寄せられた作品の中から選ばれた二十編を収録したものであり、この作文集を一人でも多くの方々に読んでいただくことで、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願ってやみません。

結びに、今回の人権作文コンテスト静岡県大会の実施に当たり、多大な御支援、御協力を賜りました静岡県教育委員会、市町教育委員会、静岡県私学協会及び各中学校並びに株式会社静岡新聞社、静岡放送株式会社、日本放送協会静岡放送局、株式会社エスパルス、株式会社ジュビロ、株式会社藤枝ＭＹＦＣ及びアスルクラロスルガ株式会社等の関係者の方々に対しまして、厚く御礼申し上げます。

令和六年二月

静岡地方法務局長　蔦啓一郎

静岡県人権擁護委員連合会会長　津田　薫

〈令和五年度審査員〉（順不同敬称略）

静岡県教育委員会教育政策課人権・教員育成室長　小林三奈子
株式会社静岡新聞社編集局社会部長兼論説委員兼編集委員　鈴木誠之
日本放送協会静岡放送局コンテンツセンター長　児成剛
静岡地方法務局長　蔦啓一郎
静岡県人権擁護委員連合会会長　津田薫
静岡県人権擁護委員連合会男女共同参画社会推進委員会委員長　河合洋子
静岡県人権擁護委員連合会子ども人権委員会委員長　原田幸男
静岡県人権擁護委員連合会高齢者・障がい者人権委員会委員長　鈴木キミヱ

目　次

◇最優秀賞（静岡地方法務局長賞）
色……焼津市立小川中学校　三年　茂川　櫻介……6
◇最優秀賞（人権擁護委員連合会会長賞）
共に生きる……浜松市立高台中学校　三年　尾崎　結衣……9
◇特別賞（静岡県教育委員会教育長賞）
私たちが気付かぬところで……静岡県立浜松西高等学校中等部　二年　小杉　理湖……12
◇特別賞（静岡新聞社・静岡放送賞）
揺るがない権利……浜松市立新津中学校　三年　澤柳　ひまり……15
◇特別賞（ＮＨＫ静岡放送局賞）
命と人権、言葉の重み……南伊豆町立南伊豆中学校　三年　渡邊　光……18
◇特別賞（清水エスパルス賞）
弟から学んだこと……東伊豆町立稲取中学校　二年　鈴木　凜……21
◇特別賞（ジュビロ磐田賞）
「普通じゃない」は悪いこと？……静岡県立浜松西高等学校中等部　二年　石川　結菜……24
◇特別賞（藤枝ＭＹＦＣ賞）
生活を楽しいものへ……島田市立島田第二中学校　三年　永岡　蒼……27

◇ **特別賞（アスルクラロ沼津賞）**

すべての人が生きやすい社会……富士市立田子浦中学校　三年　佐野　滋音……30

◇ **奨励賞**

自分らしく幸せに生きられる世界…静岡県立藤枝特別支援学校　一年　西永　匠寿……33
「助け合いのバトン」をつなぐ……伊豆市立土肥小中一貫校　一年　植松　滉己……36
心ない言葉……長泉町立長泉中学校　三年　沖住　芽依……39
個性の羽ばたくとき……長泉町立長泉中学校　三年　（匿名）……42
高齢者は弱くない……函南町立函南中学校　一年　加藤　壮祐……45
自分に誇りを……富士市立富士南中学校　三年　永田　杏樹……48
男女差別に負けない……浜松市立浜名中学校　三年　小梢　蒼依……52
本当の優しさとは何だろう……掛川市立城東中学校　三年　岸　佳澄……55
共生社会の実現に向けて……掛川市立東中学校　三年　井野　颯……58
卵から考える共生社会……袋井市立周南中学校　三年　鈴木　依子……61
偏見から生まれるもの……森町立旭が丘中学校　三年　村松　奈緒……64

注　原文を忠実に再現することを基本としていますが、編集者において、誤字、脱字等の訂正をしている箇所がありますので、あらかじめ御了承願います。
なお、編集にあたっては、本人の了解を得て掲載しております。

最優秀賞

（静岡地方法務局長賞）

色

焼津市立小川中学校
三年　茂　川　櫻　介

その頃、僕は泣いてばかりいた。不安しかなかったからだ。そして、僕は幼稚園で絵を描く時間が大嫌いだった。何色を使えばいいのか分からなかったから。これは小さい頃アメリカで生活した時の僕の話だ。

きれいな金色の髪の毛と吸い込まれそうな青色の目をした先生。僕が少しでも笑えるようにと抱きしめて迎えてくれる朝も、僕にとっては不安でしかなかった。

黒い目と黒い髪しか知らなかった僕にとって友達の絵を描くことはとても難しいことだった。何色を使うことが正解なのかわからなかったからだ。目の色、髪の色、肌の色、みんなが僕と違うのか僕だけがみんなと違うのかわからなかった。だからいつもいつも泣いていた。

日本にいると黒い目と黒い髪であることや、日本語しか話さないことに全く不思議を感じない。日本人は日本に対する帰属意識が強いと言われている。帰属意識というのは「組織や集団の一員である」という意識だ。生まれた時から言葉も見た目も「みんな同じ」環境でスタートした僕には、言葉も見

た目も「みんな違う」アメリカの教室には衝撃しかなかったのだと思う。

テレビやネットで多様性という言葉をよく聞くけれど、僕のように「みんな同じ」からスタートすることは本当の意味で多様性を理解できているのだろうか？とふと疑問に思った。自分と同じという枠から外れた人を認めることが多様性だと勘違いしていないだろうか。帰属意識の高い日本人だからこそ、この考え方をしていないだろうか。

ひとつの民族、ひとつの言語の中にいると、言わなくてもきっと分かり合えるはずという安心感のようなものがある。だから、何かを決める時に自分の意見が少数派になってみんなと同じ枠に入らなかった時、急に自信がなくなってしまい自分の考えや意見を変えて同調する。自分を抑え込んでまで合わせる必要はないとわかっていても、多数派へと流れてしまうことはよくあることだ。もちろん周りに合わせることが大事な時もある。自己主張しすぎのわがままと自分の意思を貫く強さとの境界線を間違わないように協調することが大切だと、親によく言われる。

目や髪の色が違うこと。それは普段の生活の中ではとても小さなことの一つで、外見も性格もいろいろあっていいと思う。誰かとの違いに不安になるのではなく、「みんな違う」からスタートすることが本当の意味でお互いを理解する多様性への一歩だと思った。

ただ帰属意識を持つことが悪いとは僕は思わない。そもそもなぜ僕が小さい頃のことを思い出したかというと、今年の夏、部活最後の試合で負けてしまい落ち込む僕に仲間が寄り添ってくれた時、かけ合う言葉なんてなくても温かさを感じたのがきっかけだった。

アメリカにいた当時、食べている時以外たいてい泣いている僕にいつも寄り添ってくれた男の子が

いた。教室の中、外で遊ぶ時、何を言っているか全くわからなくて会話なんて成立しないけどずっと隣にいてくれた。彼の存在があって僕は少しずつ泣かなくなった。そして僕が初めて描いた友達の目は深い緑色だった。

生まれた時から周りにたくさんの人種がいる「みんな違う」環境からスタートしているあの男の子は僕のこともその一人として受け入れてくれていたのだと思う。そこにもまた言葉を超えた温かさがあった。

見えているものや聞こえていることだけで同じか違うかを判断せずに、心で感じた通りの行動ができた時、そこには言葉を超えた温かさが存在すると思う。言わなくてもわかりあえるという帰属意識の高い日本人だからこそ、この温かさでお互いを思いやることが得意だと思うし、これはとても素晴らしいことだと思う。

周りのみんなと違うことに不安になるのではなくて、まずは自分が自分であることに自信を持つことの大切さがわかった気がする。そして自分の周りにいる人達ひとりひとりの良さに気づけることも大切だと思った。

きっと同じ色なんて存在しないのだろう。そう思えた時、みんな違うことがあんなに怖くて不安な日々だったけど、いつかもう一度あの世界に挑戦したいと思った。それが僕の今の夢だ。

最優秀賞

（人権擁護委員連合会会長賞）

共に生きる

浜松市立高台中学校
三年　尾　崎　結　衣

「もし街中で目が見えなかったり、耳が聞こえなかったりして困っている人がいたら、自分から助けてあげたいです。」

小学生の私は、ユニバーサルデザインの授業を通してこのような文章を書いた。しかし、当時の担任の先生から

「助けてあげる、というのは上から目線でしょう。書き直しなさい。」

といった指導を受けた。正直、納得がいかなかった。困っている人が目の前にいたら、障がいの有無にかかわらず助けるべきだと思った。「困っている」という状況には変わりないのに「障がいがある」という条件が加わると「上から目線」「見下している」ということにどうしてなってしまうのだろう。「助けてあげる」が正しくないのならば、「助けさせていただく」が正しいのだろうか。それはそれで違和感がないか…。思考を巡らせ、結局はその一文をまるごと消してしまった。

どのように書くのが良かったのか、答えは未だに見つかっていない。ただ、何度もその思い出を反

芻する中で気がついたことならある。当時の私は、障がい＝困るものだと思い込んでいた。言い方を変えれば偏見を持っていたということ。また、私が書いた文章では、無意識ではあるが「困らせる要因」が障がいそのものになってしまっていたということ。そう考えれば、当時の先生が仰った「上から目線」という言葉にも頷けるし、至極真っ当だと思う。

もちろん、「障がいは困るものではない」と言い切るわけではない。知ったようなことは私には言えない。ただ、もしかしたら他の人から見たら大きく見えすぎていることもあるのかもしれない。例えば、私は中一の夏に脊柱側弯症という病気を治すために背骨の大部分を金属で固定する手術をした。話だけを聞くととんでもない手術だと思われてしまうかもしれないが、それによる影響もなく、現在健康体で生活できている。できないことといえば体育の授業で行うマット運動くらいである。その程度なのだが、やはり周りの人に気を遣わせてしまうことは沢山あった。気を遣っていただくこと自体は嫌なことではないし、むしろありがたいことなのだが、私は特別助けが欲しかったわけでもなかった。相手の完全なる善意だったからこそ、助けはいらないと言っていいのか、とても複雑な気持ちだった。

自分の経験を、自分が思っている以上に壮大な出来事として捉えられてしまうことがある。優しくて、人の痛みを分かろうとするが故に。だが、その善意は時に人の本音や個性を封じ込めてしまうことにもなりうる。私が先生に指摘されたのは、「助けてあげたい」という言葉の後ろに隠れた「必ず障がい者の方々は助けを求めているのだ」という一種のレッテルだったのだろう。

先日、学校から家に帰る道中でとても元気な三人組の小学生を見かけた。全員補聴器を着けていた

ため、彼らはおそらく家の近くにある聾学校の生徒だった。彼らは手話を使っていて声を出していないはずなのに、元気な声が聞こえてくるような気がした。私から見る限り、彼らはとても楽しそうだったし、少なくとも助けを求めてはいなさそうだった。それどころか、笑顔でコミュニケーションをとる彼らは私の気持ちを明るくしてくれた。

障がいを持たない人が障がいを持つ人を助ける、というのが世間の風潮だが、逆も然りなのだと思う。私たちは障がいを持つ人々に何ができるか、と問われると、すぐに設備など物理的な方向に目を向けてしまう。だが、私が学校からの帰り道に出会った小学生たちはもっと違うものを私にくれた。人と人との関係で、どちらが助ける側、助けられる側というのはきっと存在しないのだろう。

人間が人間らしく生きる権利というのは、誰にでも平等にある。それは現実社会でも、インターネット上でも変わることはない。もちろん肌の色、国籍、性別、そして障がいの有無によっても。私たちはそれを頭では分かっているものの、いざ自分とは違う境遇の人を目の当たりにすると、どうしても「壁」を感じてしまう。自分も一人の人間で、相手も一人の人間だ。先入観を捨て、お互い対等な立場の人間として向き合うこと。それが「違い」の垣根を越えて、皆が共生できる社会をつくることに繋がるのだと私は思う。

「障がいの有無に関係なく、互いに尊重しあい、一人の人間として向き合うことを大切にしよう。」小学生の自分に向けて言いたい。もしかしたらこれから人生経験を積む上で考え方が少しずつ変わっていくかもしれない。だが、これが十五歳の私の考える、最適解だ。

特別賞

（静岡県教育委員会教育長賞）

私たちが気付かぬところで

静岡県立浜松西高等学校中等部
二年　小杉　理湖

私が毎日、通学で使う駅にはエレベーターや点字ブロック、音声で案内してくれる地図がある。障害者やお年寄りにとって優しい場所とはこんなところだと思っていた。特に点字ブロックは、どこへ行っても目にするため昔と比べて不便を感じなくなった人も増えているだろう。この世界で暮らす全員が日常生活で不便を感じなくなるよう、今後このような設備がさらに整っていくと思う。

しかし、普段、不便を感じずに生活している私たちが「誰もが生活しやすいように」などと勝手に考え、行動していくのは違うと考えている。

今年の二月、いつものように駅でバスを待っていると近くに白杖をついている男の人を見た。特に気にせず、自分のことを始めたが夕方で人も多いため心配になり、もう一度その人を見た。すると、さっきまでは点字ブロックの上を歩いていたけれど、今度は遠く離れている場所にいた。そして必死に白杖で点字ブロックを探しているように見えた。その時、私は初めて気付いた。いつも歩いて通っている場所であるのに点字ブロックさえあれば障害者も楽に移動できるものだと思っていた。しかし、

その考えは違った。駅の地面は大きな石をしきつめられてつくられているため、ごつごつしている。男の人は点字ブロックと駅の地面を区別できず、困っていたのだった。そのことに気付いたにも関わらず、声をかけようか迷った。だが、その人は点字ブロックからそれて、今にも近くの花壇にぶつかりそうである。後悔するのは嫌だったから、思い切って声をかけてみることにした。

「何か手伝えることはありますか。」

すると男の人は十四番乗り場前の階段を降りたいのだと伝えてくれた。階段まで誘導し、無事に連れて行くことができた。些細なことだったが、私はその場で飛び上がりたくなるくらい嬉しかった。たった一分の出来事のおかげで大冒険をしたような気持ちになった。

ふと、点字ブロックがごつごつの地面の上にある光景が頭を過った。それまで、男の人と同じようなことで困っている人を私は見たことがなかった。しかし、もしも同じようなことで日々、不便を感じている人がいたらと考える。点字ブロックは普段、不便を感じずに生活している人たちが設置し、満足しただけのものとなってしまう。障害者にとって、点字ブロックの有無は大きいと思う。こう私が思っていることでさえ満足していることに入ってしまうのかもしれないが。点字ブロックを設置する人と障害者の双方が話し合いをし、誰もが生活しやすい世界をつくっていくべきだと思う。

しかし、私は他人と意見の交換を行うとき、自分が少数派だとわかると意見を伝えられないことがある。バスで時々起こるこの出来事は解決するのが難しく、全員があまりスッキリすることなく過ぎてしまうことが多い。

バスにたくさんの人が乗っている時、それまで立っていた人が優先席に座ることはよくある。多く

の人が乗れるようにするため、空いている席には座った方が良いという考えからだと思う。優先席に座っている人は、お年寄りなど車内で立ち続けるのが大変な人が来たタイミングで席を譲る。この時、譲られた人がお礼を言い、すんなり席につくこともある。だが、席を譲られても遠慮して座るのをためらう人だっている。多くの人がバスで立っているため、余計に座りづらくなってしまうのかもしれない。

このように障害者やお年寄りなどは、自分と同じ思いをしている人が少ないと感じると自分の意見をはっきりと伝えられないことがあるのかもしれない。人権は誰にでもあるはずで、全員が等しい扱いを受けなければいけないと思う。しかし、実際はそれぞれが持っている権利に違いが出てしまっている。自分の意見を言いづらい雰囲気が、すでにできてしまっているからだ。この問題を簡単に無くすことはできないけれど、まずは自分が行動してみようと思う。例えば、人の前に立って話す機会ができた時、アンケートや投票でわかる多数派の意見だけでなく、少数派の意見も取り入れていきたい。多数派は強い。だからこそ、かすれて見えづらくなっている、それ以外の人たちを知ることも大切だと思う。彼らを知ることで、自分一人だと気付けなかった何か大きなことがわかるかもしれない。そしてその大きなことを解決していきたい。全員に人権があり、平等に扱われる、生活しやすい世界ができていってほしい。

特別賞

（静岡新聞社・静岡放送賞）

揺るがない権利

浜松市立新津中学校
三年　澤　柳　ひまり

一昨年の十二月、他県に住む私の祖父は他界した。コロナでずっと帰省できていなかったが、その年の二月に病気を患い手術を受けることになったと、祖母から母に連絡が入った。母はとても心配したが大きな手術ではないと説明を受け少し安心した様子であった。コロナは相変わらず続いていて、他県への移動が制限されていたため手術前に祖父の顔を見に行くことはできなかった。

三月に入り祖父は入院した。その日祖父は祖母を助手席に乗せ自分で運転し、二週間で退院するつもりで病院へ行った。しかし祖父は九か月後、家に帰ることなく亡くなった。手術は成功した。しかし祖父は術後せん妄という状況に陥ったのだ。術後せん妄とは手術を受けたことがきっかけで起こる意識の混乱であり高齢者に起こりやすいと言われている。通常であれば面会に来た家族との会話や普段から使用している私物を使うことで記憶の整理がつき、一週間ほどで改善されるらしい。しかし祖父の場合、コロナで面会が許されず、家族が行き来できない理由から私物の持ち込みも制限されていた。その結果、祖父は意識が混乱したままとなってしまったのである。家族はみな祖父のせん妄が改

善すると信じていた。しかし病院側の祖父への対応は一変していた。少しでも状況を聞こうと家族が電話すると少しふざけた様子で「今日もいっちゃってますね」と祖父を侮辱するような言葉が返ってくることがあった。祖父は内臓に病気を抱えて入院したが元々認知症であった訳ではない。しかし病院では「ぼけ老人」として扱われていたのだ。数日前まで守られていた祖父の人権はそこにはなかった。少なくとも私たち家族にはそう感じた。

「エイジズム」という言葉がある。「年をとっているという理由で高齢者たちを一つの型にはめ、差別すること」を意味する言葉である。赤ちゃん言葉で話しかけたり子ども扱いをすることもエイジズムの一つである。祖父は術後せん妄が改善せず混乱した状況で病院に迷惑をかけたのかもしれない。しかし混乱している祖父を「いっちゃってる」と言う言葉で表現することは許されることではない。祖母や叔父たちはそんな状況でも面会を許されない中、様々な場面で医者や看護師から祖父を侮辱する数々の言葉を耳にしたという。地域で一番大きなその病院ではエイジズムが日常になっているのであろう。だから家族が深く傷ついていることにも気付かず話を続けることができたのだと思う。結局祖父は術後せん妄が続いたことをきっかけに手術をした場所とは関係ない場所に不調が出始め退院できないまま他界してしまった。

祖父は大きな会社の社長であった。葬儀の打ち合わせでは弔問客で特急電車が混雑することが心配されるほど人望の厚い人であった。そんな祖父が人生の最後にエイジズムという差別を受けたことは私たち家族にとって忘れがたい悲しみである。年をとることは、修正すべき問題でもなければ、治療するべき病気でもない。私たちはだれもが例外なく年をとるのであるから、エイジズムなどというく

だらない差別をなくし、この世界を安心して年のとれる場所にしていきたいと私は思う。

私たちが生まれながらに与えられた「人権」はすべての人が平等に生きることを、生きている限りずっと保障される権利である。それは仮に手術でせん妄となったくらいのことで揺るぐものではあってはならない。昨日も今日も人であることに変わりはないのだから。

特別賞

（ＮＨＫ静岡放送局賞）

命と人権、言葉の重み

南伊豆町立南伊豆中学校
三年　渡　邊　　光

9月1日。この日は子供の自殺者が一番多い日らしい。9月1日といえば夏休みが終わり、学校へ行き始める頃だ。私は学校が大嫌いだ。理由はたくさんあるけれどその中の一つには言葉遣いがある。

「死ね。」「うざい。」「きもい。」入学してから2年間ずっと教室にはそんな言葉があった。私はそれが許せない。へらへら笑ってふざけながら挨拶でもするかのように暴言を吐く。おかしい。皆が皆堂々と自分の意見が言えるわけじゃない。何で言われている側の人間が自分の感情を殺して我慢してびくびくしながら顔色を窺わなきゃいけないの。

私は一時期本気で死のうと思ったことがある。死にたかったわけじゃない。生きているのが辛いから死んで楽になりたかった。相談したくてもできなかった。明日がくるのが嫌で寝るのが遅くなってしまい、寝不足の日々が続いた。「大丈夫？」なんて言われてもうなずくことしかできなかった。

これを読んでいる全ての人に言いたい。

人権っていうのは形のないものなんだ。だから目に見えない。だからって壊しちゃいけない。言葉

を発する前に考えて欲しい。自分の言葉に責任をもって欲しい。一度失った命はもう一生戻ってこない。どんなに悔やんでも悲しんでも絶対に戻らない。言葉っていうのはすごくすごく重い。たった一言であと何十年も生きるはずだった人生をいとも簡単に奪っていってしまうから。

そしてもしこの作文を読んでいる人の中に一人でもいじめや差別をされていて苦しい思いをしている人がいるなら私は貴方に伝えたい。私が思うに人権は貴方を守るためにある。貴方の命に価値があるから守っている。お金なんかと比べものにならないぐらい価値がある大切なものだから。今、貴方の人権は守られていないのかもしれない。辛くて苦しくてしんどいのかもしれない。でも生きることを辞めないで欲しい。私の身勝手だけど聞いて欲しい。貴方が死んで悲しむ人間がここに必ず一人はいる。これだけは覚えていて欲しい。

全員の人権が守られるべきだと私は強く思う。誰かの言葉で命を落とす人間がいてはならない。誰かに暴言や悪口を吐いた人がいるなら自分のその行動を恥じた方がいい。このまま人権が守られなければ今よりもっと自ら死を選ぶ人が増えるだろう。それでいいのだろうか。なぜ学ばない。人権が守られていない環境をつくっているのは同じ人権をもつ人間なんだよ。変わろうよ。何も知らない純粋無垢な子供達を学校に行かせただけで何かが違っていただけで自分で死を選ぶように追い込んだのは人権にずかずかと足を踏み込んで傷つけた人間だよ。いじめ?差別?そんなの違って当たり前なこと。違うところがあるから良くも悪くも人に影響を受けやすいの。人間だから当然皆一度は絶対に不快な気持ちになったことがあると思う。だけどそれを言葉に出して何の意味がある?その言葉はもう人権を壊す武器にしかならないんだよ。人権は簡単に壊されてしまう。命も殺そうと思えば簡単に奪える。

だから人権も命と同じくらい大切にされるべきだ。

誰もが死ぬ痛みや苦しさ、辛さを知っているから死ぬことを恐いと思う。人権も同じ。人権が守られていない人は死ぬことよりも痛いし、苦しいし、辛い。死ぬ方が楽だと考えるぐらいだから。

家族や先生、友達が死んだらどう思う?言葉に表せないくらい悲しい。だから私は命と同じくらい大事な人権が守られていないことを悲しいと感じる。

私のクラスは変わることができた。新しい先生が暴言を吐いた生徒を注意してくれるようになったから。そうやって人権が守られる環境ができることを私は願う。人権が守られていないことはおかしい。おかしいことをおかしいと言おう。誰か一人が発言すれば変わっていくと思う。周りが変わらなかったとしても救われた人は絶対にいると思う。

今一度人権について全ての人が考えるべきだ。ロシアとウクライナの戦争、新型コロナウイルスなど人々が混乱している今だからこそ人権を守るべきだ。少しでもいじめや差別をなくそう。命と人権の尊さ、言葉の重みを理解して、誰かに手を差しのべよう。

特別賞

（清水エスパルス賞）

弟から学んだこと

東伊豆町立稲取中学校
二年　鈴　木　　凜

私には、四歳下の弟がいます。きょうだいと一緒に同じ小学校へ通うのは当たり前のことで楽しみにしていたのですが、弟は私と違う学校に行きました。特別支援学校です。重度知的障害と自閉症だから、私と同じ小学校へ行けませんでした。

弟が一歳になる頃から、母はずっとスマホで弟の様子を検索してばかりいて、よく泣いていました。だから、病院で診断されたときには、「やっぱりそうだよね。」と言って、また泣いていました。そのときの私も、確かに弟は同じくらいの子供と比べると落ち着きがなかったし、「なんでしゃべらないんだろう。」と思っていました。しかし、名前を呼べば振り返ってにこにこしていて、お菓子をあげると喜ぶし、小さな手をつなぐとぎゅっと握り返してくるし、かわいい弟には変わらないと思っていました。その気持ちは今も同じです。もちろん、弟といろいろな話をしたり、一緒にバレーをしたり、他の姉弟みたいに普通のことをしたいなと思うこともあります。家の中を汚したり、出かけたときに大きな声を出したりするときは、正直いらいらしてしまいます。しかし、一番困っているのは弟なの

かも知れないと思ってからは、私の考え方が変わりました。

弟みたいに見た目ではっきりと障害がわかる人もいれば、そうでない人もいます。障害があるとかないとか関係なく、相手の立場になって考えること、相手を思いやることは、人間関係でとても大切なことだと思います。そのような優しい心がたくさんある世の中になってほしいです。もちろん、障害がある弟を特別扱いしてほしいわけではありません。できないことはたくさんあるけれど、他の人に迷惑をかけることもあるだろうけど、普通に接してほしいです。本当に成長がゆっくりで、少しずつだけど、できることも増えてきました。そんなときに家族みんなで「すごいね」と言って拍手をすると、弟はジャンプをして喜びます。言葉が通じているかいないかわからないけれど、一緒に笑っていると、そんなことはどうでも良い気がしてきます。弟のことを、家族としてずっと応援していきたいです。

だとしても、家族だけで弟を育てるのは大変です。学校まで遠いし、スクールバスが家の近くを通らないので、毎朝母は往復一時間半かけてバスが停まる福祉施設まで弟を送っています。支援学校が終わったあと施設で過ごすので、私も時々父と一緒に迎えに行きます。職員さんはみんな優しくて良い人たちばかりで、その日の弟の様子を詳しく教えてくれて、家族のように大事に接してくれていることがわかります。学校の先生たちもそうです。暴れてしまうときは落ち着くまで待ってくれるし、弟の得意なことを伸ばそうとしています。病院の先生やリハビリの先生も弟のことをよく理解してくれています。母は口ぐせのように、「たくさんの優しい人に囲まれて幸せだよ。」と言います。障害がある人もその家族も、心が疲れてしまわないような環境であることを感謝しているのだと思います。

弟の障害がわかったときに、私はこれから障害がある人に出会っても、変な目で見るようなことは絶対にしないようにしようと思いました。でも、そう思うこと自体がとても失礼なことだと反省しました。考えてみると、出かけたときに弟をそんな目で見る人はいないし、一緒にいて嫌な思いをしたことなど一度もありません。私が思っている以上に、思いやりにあふれる世の中になっているのかも知れません。よく「障害者」ではなく「障がい者」だ、みたいなことを聞きますが、私にとっては漢字なんてどうでも良いことです。そんなことよりも、障害がある人に対して、健常者とはちょっと違うその個性を理解して一人の人間として接することが大切だと思います。

人権とは、人間らしく生きる権利のことです。もちろんそれは、健常者にも障害者にもある権利です。人権が誰かによって踏みにじられたり、差別されたりということは許されないことです。相手も自分も大切にできる人ばかりなら、悲しい事件など起きません。すべての人にとって、笑顔で楽しく過ごせる社会になることを願わずにはいられません。大事なことに気づかせてくれた弟の存在に感謝しています。そしてこの先、弟とは違う面で生きづらさを感じている人に出会うことがあれば、中学生の私でもできることを見つけ、社会の一員として共に生きていけるように、積極的に行動していきたいと思います。

特別賞

（ジュビロ磐田賞）

「普通じゃない」は悪いこと？

静岡県立浜松西高等学校中等部
二年　石　川　結　菜

「普通」とは何か、考えたことはあるだろうか。みんなと同じこと、当たり前のこと、という意味で使っている人が多いと思う。では、「普通じゃない」はいけないことなのだろうか。私はそうは思わないが、「普通じゃないね」と言われて嬉しい人はあまりいないと思う。みんなが何気なく使う「普通」という言葉について少し考えてみたい。

私がこの言葉に違和感を感じるようになったのは、中学一年生の冬だ。私が病気で大学病院に入院していたとき、一枚のポスターが目に入った。〝「入院中でも、勉強がしたい！」そんな子どもたちの思いを受けて、「たんぽぽ学級」が誕生しました。〟そう、院内学級のポスターだった。実際、私の隣の病室の子もここに通っているようだ。みんなにとっては、毎日学校に行くことは「普通」であり日常だろう。しかし、病院に入院し治療を続けている子どもたちにとっては、学校に行き、授業を受け、部活をして、家へ帰る。そんな「普通」が困難なのだ。なんだか可哀想だな、そんなことを思いながらその場を後にした。

しばらくたったある日、私が朝食を下膳しに廊下へ出ると、院内学級の先生と生徒たちを見かけた。髪の毛が抜け落ちてほとんどない子や、車椅子に乗った子など病状は様々だが、みんな笑顔だった。一目見ただけで、この子たちは心から笑っているのだと分かった。きっと、この子たちは病院という狭い空間の中でも楽しみや喜びを見出して生活しているのだ。なんだか、可哀想だなんて思った自分が恥ずかしくなってきた。むしろ、当たり前の日常に感謝したり、何気ない日々を誇れない私たちの方が可哀想なのかもしれない。「普通じゃない」も悪くないのかも。私が初めてそう思えた瞬間だった。それから、私の病院生活にも少し変化があった。今まで嫌だった検査や治療が嫌じゃなくなったわけではないけれど、誰かのちょっとした優しさに気づけるようになったり、今まで関わろうとしなかった他の患者さんやお見舞の人と少しずつ関わるようになった。「普通じゃない」生活を楽しめるようになったのだ。とても些細なことで、普通に生活していたらなんとも感じなかっただろう。しかし、私にはとても大きなことで、私の心の奥にあったわだかまりがだんだんとほぐれていくように思えた。

こうして長い入院生活も終わり、私はいつもと同じ「普通」の日常に戻ってきた。三週間も学校を休んでいたせいで、勉強もみんなより遅れて、体力も全然なくなっていた。しかし、私は学校の先生は教えてくれない「普通じゃないことの素晴らしさ」を、院内学級に通う子どもたちから教えてもらった。その中で私はこう考えた。「普通」という言葉は自分の尺度ではかられていると思う。私たちにとっては毎日学校へ行って、授業を受けて、部活をして、家へ帰る。これが「普通」だ。しかし、あの子たちは普通の学校には行かない、行けないのだ。そのため、病室から院内学級へ行き、三時間の

授業を受け、自分の病室に戻る。これがあの子たちの「普通」だ。このように「普通」は自分を基準とした言葉で、時に自分の価値観や考えを相手に押し付ける言葉にもなる。私は、病院から出られない子どもたちは不幸で可哀想な子たちだと思っていた。「普通じゃない」から。しかし、私たちと違うから不幸だというわけではない。不自由がたくさんあったって不幸とは限らない。「普通じゃない」＝（イコール）「不幸」ではない。だから私は思う。「普通」になんかならなくていい、なろうとする必要はないと。誰に否定されたって、バカにされたって私は私だと胸を張って言っていいのだと、院内学級に通う子どもたちから教えられた。

私が「普通じゃない」ことは悪いことではないと思っているのはこのことからだ。みんなそれぞれ違う「普通」を持っている。だから、新しい発見がある。会話がもっと楽しくなる。とても素晴らしいことではないだろうか。このような考えが広まることが、いじめや誹謗中傷を減らす第一歩ではないだろうか。さらに、ＳＤＧｓの目標でもある「多様性」にも繋がっていくと思う。「普通」という言葉を使う前に、私が思っている普通は相手はどう思っているのかを少し考えてみてほしい。そして、自分の普通とは違っていてもお互いに認め合って、尊重し合える世界を作っていきたい。「普通じゃない」は「個性」だ。素晴らしいことだ。自信を持っていい。誇らしく思ってもいい。みんなの持つ「普通」を理解し合い、本当の多様性が生まれる。そして差別や戦争が減る。「普通じゃないこと」が世界を変える。そんな日が来ることを願って、まずは周りから変えていこう。

特別賞

（藤枝ＭＹＦＣ賞）

生活を楽しいものへ

島田市立島田第二中学校
三年　永　岡　　蒼

生理はすべての女性が経験するものだ。私も、私の友達も同じだ。

生理には生理痛というものがあり、酷い人だと吐き気がしたり、腹痛になったりする。それでも学校に来るのは、授業を受けなければならないからだ。休みたくても休めない。そう思っている人が多くいる。友達の中にもお腹に手をあてて苦しそうにしているところを何度も見ることがある。何度も保健室と教室を行き来したり、早退する人も多い。そこまで頑張って学校に来る必要があるのか。体調を崩していても授業に出席する必要があるのか。苦しむ姿を見ると胸が痛む。少しでもこの苦しみを和らげることはできないだろうか。

労働基準法第六十八条に「使用者は、生理日の就業が著しく困難な女性が休暇を要求したときは、その者を生理日に就業させてはならない（厚生労働省ｗｅｂサイトより）」という内容が書かれている。これは生理休暇にあたり、働いている女性は、仕事の内容に関わらず誰でも休暇をもらえるというものだ。では、学校はどうなのか。調べてみると、小学校、中学校、高等学校には生理休暇は存在

しないことがわかった。働く女性に対しては休暇が認められているのに、学生に対しては何も配慮がされていないのだ。

休みたくても休めないのには様々な理由がある。日本若者協議会が実施したアンケートでは、休めなかった理由について、「成績や内申点に悪影響がでると思った」と回答した人が約六十三パーセントもいた。その中には実際に成績を下げられた生徒もいる。学校側としては、授業は各々の生徒を評価する大事な要素の一つなのかもしれないが、「何もわからないくせに」と感じてしまうことがある。水泳の授業も休むと必ず補習というものがついてくる。私は補習が面倒なので休みたくない、という気持ちでいつも学校に来ていた。何も気にすることなく授業を楽しめる。休みたいと思ったら何も気にすることなく休める。そんな学校になったらどれだけ良いだろうか。

生理について理解が深まっていないのは保健の授業にも関係あるのではないかと思う。私の中学校では男女共同で保健の授業を受けている。だが、女子生徒の私でも知らない事がまだ多くある。内容が浅いように感じるのだ。最近では、男子生徒から生理のことでいじめを受けている生徒もいる。もっと様々な知識を得ることができればいじめの防止にもつながるのではないか。また、女子生徒も生理にまつわる病気や注意点を知ることができ、リスクを軽減することができると思う。授業内容についても少しずつ変えていく必要があると考えている。

「生理の貧困」についても近年問題視されている。生理の貧困とは、経済的な理由などから生理用品を入手することが困難な状況にあることを指す。私が調べたところ、一か月にかかる費用は、個人差はあるが平均千二百円ほどになる。国の調査では、回答者の八十一パーセントが入手するのに苦労

したことがあると答えている。

では、この問題を解消するために私たちができることはあるだろうか。日本では、国や自治体でナプキンの支給があったり、困っている人のために支援団体に寄付をすることもできる。生理の正しい知識を身に付け、貧困について決して恥ずかしいことではないことを理解することが大切になってくるのだ。

生理用品に限らず、毎日の食事代、学費、習い事、服や靴など、私一人のための出費が多いことに気がついた。生理用品を買うことも困難となっている人々がいる中、不自由なく生活していることが当たり前ではないことを改めて実感した。これを機に、自分の事が関わっている金銭を把握し、もらっている小遣いを大切にして、なるべく無駄なものは買わないように意識していこうと思った。

生理を無くすことはできない。だが、生理によるストレスや不安を和らげることはできる。国内でも女子中学生が理解を深めるため、スピーチコンテストで生理について思うことを人々に訴えた。このような女性の声にもっと耳を傾け、より良い社会を作っていくことが大事だと私は思う。年齢が違ってもみんな女性であることに違いはない。もちろん、これは学校側のみの問題ではない。私も、女性も、男性も、たくさんの人がこの現状を知り、行動に移していくことが必要なのだ。世界中の人が幸せに生活するためにできることはないか、目を向けてみようと思う。

特別賞

（アスルクラロ沼津賞）

すべての人が生きやすい社会

富士市立田子浦中学校
三年　佐　野　滋　音

自分らしく生きていくことを性別によって諦めたりする必要はないだろう。また見た目のイメージによって人の価値を勝手に決めてはならない。

僕がよく利用するアパレルショップには、トランスジェンダーと思われる店員さんがいる。近年「ＬＧＢＴＱ」という言葉を耳にするようになっているが、「Ｔ」トランスジェンダーとは「出生時に割り当てられた性と、自身が認識する性が一致しない・違和感を持ち続ける人」のことを指す。その方は、ショートヘアで胸元にフリルのついた可愛らしいブラウスを身につけていた。顔を見ると、うっすらひげが生えていたことがわかる青みがかった顎が目に入った。なんとなく違和感を覚えた。この人はどちらの性別なのだろうと考えてしまったのだ。ただ僕以外の人は、そんなことを気にしている素振りは全くなく、自分の欲しい服のサイズをその方に尋ねていた。僕はその違和感の答え合わせを求めていたのか、しばらくお客さんとその方のやりとりを眺めていた。売り場のタグを一つ一つ丁寧にめくりながら、サイズを確認し、その場にないことがわかるとお店の裏にあるか確認しに行く。お

客さんの求めるサイズの服をその店員さんは熱心に探していた。その間、店員さんは一度も面倒くさそうな顔をすることもなく、むしろ楽しそうにさえ見えた。その姿を見ていたら、違和感の正体を明かしたいだなんて思っていた自分のことがだんだん恥ずかしくなった。少し後ろめたい気持ちのまま、会計に向かうと、その方が対応してくれた。そして購入する服のサイズに誤りがないか確認すると、服を丁寧にたたんで袋に入れてくれた。僕がいつも自分でたたむより、何十倍も綺麗にたたまれており、その方の仕事に対する姿勢や人柄が表れているようだと思った。

じめじめとした蒸し暑い夏がすぐそこまで近づいてきた頃、夏服を求めて僕は再びそのショップを訪れた。その日もあの店員さんが働いていた。前回会ったときよりも髪が伸び、緩やかなウェーブがかったボブヘアだった。そして服は鮮やかな赤に花柄のチュニックを身につけていて可愛かった。その姿を見て、僕は確かに嬉しさと安心感を抱いた。それは、たぶんこの店員さんに会えたことへの嬉しさと、変わらず自分の好きなファッションを楽しみながら働いていてくれていたことへの安心感だったと思う。

最近は芸能人が自身の性自認や性的指向についてカミングアウトするニュースを目にすることが増えてきている。きっと勇気がいることだ。その告白に対して批判されたり、誹謗中傷されたりして深く傷つけられることもあるということを僕は知っている。だから、この店員さんが今も楽しそうにそこで自分らしくいてくれたことに安心したのだ。またショップはいつも和やかな雰囲気があり、周りの人の理解があることもこの店員さんがありのままでいられる理由の一つなのだと感じた。

僕はこのアパレルショップに興味が湧いて、少し調べてみた。すると、ジェンダー平等や多様性を

特別なテーマとしてではなく、日々のルーティーンとして取り組んでいることがわかった。そして、全ての人が自分らしく活躍できる職場を提供していくことを目指しているということを知った。また、「プライドパレード」の行われる頃には、誰もが自由に人を愛する権利があることを支援し、スローガンをプリントしたTシャツやアクセサリーを販売し、売り上げの十パーセントを国連の基金へ寄付する活動を行っていた。正直、日本ではジェンダー平等やLGBTQについてまだまだ浸透していないというのが現実だと思う。でも、こうした活動が追い風になり、誰もが平等な社会になっていくと信じている。

人は、考え方や、好み、見た目がみんな違う。それは当然のことだ。でも、それをオープンに表現することができるときとできないときがある。目に見えない偏見だったり、価値観、常識という枠を人から押しつけられて、自分の好きなファッションを身につけることを諦めたり、自分の思想を押し殺してしまうことがある。自分が自分らしくいるのに、どうして人の顔色をうかがわなければいけないのだろう。誰かに迷惑をかけることをしているわけではない。ただ自分が自分らしくいたいだけだ。でも、多くの人の中には、自分と違うものを排除したり、受け入れたくないという考えがあったりする。それは意識的にしろ、無意識的にしろ、人間あるのかもしれない。でも、だからこそ、僕は多様なあり方を認めていける社会を強く望んでいる。全ての人が見た目や指向のイメージによって価値を決めつけられたり、誹謗中傷されたりするようなことがなくなれば良いなと思う。

僕にこのことを考えさせるきっかけを与えてくれた店員さんに心から感謝し、全ての人が自分らしく生きていけることを祈っている。

奨励賞

自分らしく幸せに生きられる世界

静岡県立藤枝特別支援学校
一年　西　永　匠　寿

人権とは「自分らしく幸せに生きられる権利」のことだそうです。僕は学校の授業で人権について初めて学習しました。「人権」という言葉は聞いたことがありましたが、どういうことかはよく分からず、授業を通して知り、色々と考えるようになりました。

僕には障害がありますが、障害があるからといって差別されていると感じることがないので、人権に守られているのだと思います。

例えば、マクドナルドに行ったとして、障害者だから注文できませんと言われたらショックです。でも、そう言われたことはありません。また、昔の先生は、怒ると生徒を叩いたり暴力を振るったりすることもあったそうですが、僕は先生から暴力を振るわれる経験をしたことがないし、見たこともありません。だから、人権に守られていて、自分らしく幸せに生きられていると思います。

しかし、世の中には障害者に対する差別があります。おそらく障害のある人が線路に侵入して電車を止めてしまったニュースに対して、インターネットでは障害者に対する悪口がたくさん書かれてい

ました。僕は、電車を遅らせてしまうことは悪いことだと思いますが、悪口を言ったり、悪口をインターネットに書いたりすることは人権侵害だと思いました。

僕は、特別支援学校に通っています。勉強はできます。でも、気持ちの切り替えが苦手です。僕の障害は、見た目だけでは分かりません。

僕が通っている学校には、肢体不自由で車いすに乗っている人たちも一緒に学んでいます。車いすに乗っていると、足が不自由なのだなということが見た目で分かります。目の見えない視覚障害の人は白杖を持っていたり、耳の聞こえない聴覚障害の人は補聴器をつけていたり、見た目で障害者だと分かるかもしれません。

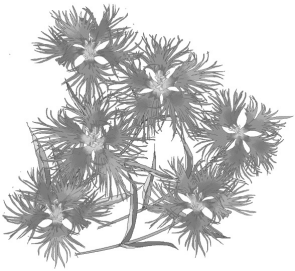
僕のクラスメイトにはヘルプマークをつけている人がいます。ヘルプマークとは、赤色の下地に白色でプラスマークとハートマークが描かれているマークです。障害や病気等で援助や配慮を必要としていることを表し、サポートしてもらいやすくするためのマークです。ヘルプマークをつけているクラスメイトは、障害者だということは見た目からでは分かりません。見た目は普通の女の子ですが、実は障害者です。

障害者の特徴として、じっとすることができなかったり、しゃべり続けてしまったり、衝動的に行動してしまったり、読み書きや計算が苦手だったり、言葉の発達の遅れがあったり、対人関係が苦手だったりすることがあります。あの人も、この人も、そして僕も、同じ学校に通っている人の中には、このような特徴がある人が多いです。また、特別支援学校ではない一般の中学校でも、発達障害という障害がある人はいて、小学校・中学校では八．八パーセントの割合でクラスにいるそうです。一ク

ラスに三人はいるという数字なのだそうです。僕はこの数字を聞いて多いなと感じました。見た目からは障害があるかどうか分からないけれど、配慮や支援が必要な人が世の中にはたくさんいるのだと思いました。

車いすの人のように、見た目で障害のあることが分かる人もいれば、発達障害のように見た目からは障害のあることが分からない人もいます。だから、僕は困っている人がいたら「大丈夫ですか？」「手伝えることはありますか？」と優しく声をかけたいです。僕が困っている時に、優しく声をかけてもらえたら嬉しいので、僕も優しく接したいと思いました。

僕は、世の中の人みんなが優しく接してくれたら、生きやすい世の中になると思います。例えば、電車やバスで席を譲ってくれたり、クラスメイトに優しくしたり、失敗しても怒らずに優しく声をかけてくれたり。そういう優しい行動をみんながすることで、優しい社会になると思います。そして、障害のある人も、障害のない人も、誰に対しても優しくすることで、誰もが「自分らしく幸せに生きられる世界」になると思います。



奨励賞

「助け合いのバトン」をつなぐ

伊豆市立土肥小中一貫校
一年　植　松　滉　己

「助け合いを心がける」という言葉を聞いたとき、みなさんはどう感じるだろうか。ぼくは、助けてもらったら助け返すことを心がけることだと思っていた。

小学生のころ、ショッピングセンターで家族と買い物をしているとき、ある女性が目に留まった。杖を突きながら歩く女性。周りを通る人が何人も女性にあたり、そのたびに倒れそうになる女性。（かわいそうだな。）ぼくは思った。でも、それだけだった。

そんなとき、後ろから女子高校生二人が小走りでその女性に駆け寄って行った。一人は女性の荷物を持ち、もう一人は「大丈夫ですか？」と語りかけながら手をつないで女性を端のほうへと誘導した。女性は泣いていた。

ぼくはこの女子高校生二人を見て思った。「心がける」とは、思っているだけではだめなのだと。

今までのぼくは、困っている人に対して（かわいそうだな。）と思う自分が人に対してやさしく接していると思っていた。でもそれは大間違いだ。心の中で思っても行動に出す勇気はなかった。ぼく

は「心がける」とは、行動に出して初めて本当の意味になることを知った。
それから何年かして、学校帰りに友だちと遊んでいるとき、交番の前で一生懸命ドアを開けようとしているご高齢の女性がいた。ぼくと友だちは急いで向った。ぼくはショッピングモールでの出来事を思い出し、「話しかける」と心に決めて走った。「大丈夫ですか？」と友だちが話しかけた。女性はこちらを向いて「ドアを開けてくれる？」と言った。ぼくがドアを開けると女性は交番の中へと入っていった。時間に余裕があったぼくたちは女性が心配で交番の近くで女性が出てくるのを待った。
十分、二十分しても女性は出てこない。「えろー遅いな…」ぼくたちは顔を見合わせた。交番の中を見ると女性が一人で何か話しているのが見えた。でも、交番の中には誰もいない。入口のカウンターには「ただいまパトロール中です」と書かれたプレートが置いてある。耳を澄ましてみると女性の声が聞こえた。「こんにちは」と何度も何度も言い続けていた。驚いた。ぼくたちは交番の中に入り女性に話しかけた。「この交番、今だれもいないらしいですよ」すると女性は笑顔でこちらを向いて「ありがとう」と一言返してくれた。それから交番の前で警察官が帰ってくるのを待っている間、女性と学校の話をした。
五分ほどして警察官が帰ってきた。女性は警察官に話しかけながら交番の中へと入った。
二、三分して女性が出て来た。警察官も一緒だ。時刻は午後五時に近い時間帯。その日は日が陰るのが早く、あたりはだんだんと暗くなっていた。「怒られる」と思ったぼく。覚悟を決めた。しかし、女性は笑顔で話し始めた。「この二人が待っている間、ずっとお話ししてくれてたの」すると、警察官もこちらを向いてぼくたちに語りかけてくる。「本当？ありがとう」

ぼくはすごくうれしい気持ちになった。純粋に「ほめられる」ということがこんなにもうれしいことなのだと。そのとき、ショッピングセンターでの女子高校生二人の姿が頭に浮かんだ。「二人はこういう気持ちだったのかな？」

大人は「してもらってうれしかったことは自分もしなさい」と言う。でもそれは少しずれていると思う。今、ぼくがだれかを助けることによって、その助けた人が他の誰かを助け、その助けられた人がまた他の誰かを助ける。これをぼくは「助け合いのバトン」だと思っている。自分には返ってこないかもしれない。でも、他の誰かのためになるのであれば…。

真の「助け合い」は「助け合いのバトン」だとぼくは思う。日本中のすべての人が「助け合いのバトン」をつなげば、多くの助け合いが生まれ、それが一人でも困っている人の助けになる。「助けてもらったから助け返す」などといった一対一の助け合いも当然必要だ。でも、「助け合いのバトン」は一対一の助け合いよりもスケールが広がり、もっと広い視点で「助け合い」について考えることができるのではないか。それは最終的に「人権」を考えるきっかけにつながると思う。

だからこそぼくは思う。この世界に生きるすべての人が「助け合いのバトン」を握る「ランナー（選手）」なのだと。

奨励賞

心ない言葉

長泉町立長泉中学校
三年　沖　住　芽　依

私の母と祖母は、医療従事者だ。新型コロナウイルスが流行し世界的に病床がひっ迫し、学校も休校になっている中、母と祖母は朝から晩まで働き続けていた。もちろん有休もあったにはあったのだが、日々増え続ける患者さんのために病院へ向かっていた。自分一人が休むことで周りへの負担が大きくなることを避けていたのだろうと今では思う。自分がコロナにかかってしまう可能性だって多くあったのに、世界中の人のために働き続ける母と祖母に毎日感動していた。

ある日、友達と公園で遊ぶ約束をしていた。鬼ごっこやドッヂボールをしているうちに汗をたくさんかいた。お友達はその場でマスクを外し遊びだした。私は母と祖母に

「もしコロナにかかったら、大変な思いをするのは芽依自身だよ。それに、私たちもかかったらいけないから、マスクをしていてほしい。」

と言われていたので外さずに遊び続けた。遊んでいるうちにお友達二人のお母さんが来た。そして私を指さしてこう言った。

「あの子の家は医療関係だから遊ばせられないわね。次は私のお家で二人で遊ばせましょう。」小さい声で言ったつもりなのだろうけれど、私の心には深くこの言葉が刺さった。「家族に医療従事者がいる」これだけで私は遊べる相手が減っていくのだなと思い、その日はあまり眠ることができなかった。案の定、次の日にそのお友達からはもう遊べないと告げられ、私は一人ぼっちになった。私はこの状況を母と祖母のせいにした。

「なんで医療従事者なんかになったの。そんな仕事辞めてよ。」

と家で叫んでしまった。その日はそれ以来話さずに過ごした。もちろん次の日も、その次の日も、一週間後も私がお友達と今までのように遊べることはなかった。あまり話したことのない子が話しかけてくれ、遊ぼうと言ってくれることもあった。しかし、私にはそれが同情としか思えなかった。可哀想な子。そう言われているような気がして、突き放してしまうことばかりだった。

そんな中、私はとあるテレビ番組を見た。「医療従事者差別について」という内容で今、医療従事者の方や、その家族が医療機関に勤めているということを理由に近寄らないでという心ない言葉を言われたり、保育園に子供を預けるのを拒まれ、仕事を休まざるを得なかったりするケースがあるという話だった。医療従事者の中の約10パーセント以上の人がこの医療従事者差別を受けたことがあると回答していた。想像していたよりもはるかに多くの方が差別を受けていると知り、悲しい気持ちになった。世界のために、危険なことに対しても戦い続け、身を挺して重い責任を担っているのになぜこんなにも心ない言葉を言う人がいるのか私にはわかりません。もちろん、自分がコロナにかかりたくないからという人がいるということはわかります。しかし、医療機関で働いているという、たった一つ

の条件に対してどうこう言うのはおかしいと思います。みんなコロナにかかりたくないのは同じです。そんな気持ちを持ちながらも戦っている人がいるのです。

私は、医療従事者として昔から医療の最前線に立ち頑張っている母と祖母を誇りに思っています。自分よりも周りを優先することは簡単なことではないと思うからです。母と祖母の役に少しでも立ちたいという思いがあるので、私は周りの人に何と言われようとマスクをつけます。母と祖母のようにたくさんの人を救ったりすることはできませんが、今の自分にできる最善のことをしているつもりです。

私たちは医療従事者の方々に支えられ、守られて生活しています。しかし、医療従事者の方は誰に守られるのでしょうか。自分で自分を守ることしかできないのではないでしょうか。周りを守り、自分も守る。そんな大変なことをしているのに加えて差別をされたら、限界が来てしまうのではないでしょうか。私たちには、世界中の人々を守ることはできません。しかし、守れる人に協力することはできます。私たちは、医療従事者の方を差別するのではなく、協力する姿勢を示すことが大切だと思います。医療従事者の方、その家族の方に敬意を払い、生活していくべきだと私は考えます。全ての人が生きやすい世界のために。

奨励賞

個性の羽ばたくとき

長泉町立長泉中学校
三年　（匿名）

僕はＡＳＤという障害を持っている。ＡＳＤとは、自閉症スペクトラム障害の略称だ。発達障害の一つで、人とのコミュニケーション能力の欠如、強いこだわりを持つ、などの症状が見られる。百人に一人がＡＳＤと診断され、完治することはない。

僕も人とのコミュニケーションが苦手で、本に対する並々ならぬ執着があった。そして、それらが原因でいじめられることもあった。

これらのことから僕は、その人の特殊な「個性」のあるなしにかかわらず、現在差別されている人々も含めみんなが平等に暮らせる社会。そんな社会を作ることが大切だと僕は考えている。

差別されている人に含まれるのはＡＳＤの人だけではない。生まれつき身体に障害のある人々、精神的な障害を持っている人々全員が含まれる。

みんなと違う「個性」を許容していく社会それを作るために僕たちには何ができるだろうか。

ところで、僕が障害のことを「個性」と表現したのにはある理由がある。それは、僕は障害はその

人が持つ一つの特徴として認められるべきだと考えているからだ。

もし、身長がとても高い人がいたら、それは個性として認められるだろう。身体的な障害のある人も、精神的な障害のある人もその人と同じく「個性」を持っていると認められるべきだと僕は考えている。

この考え方のもととなったのは、カウンセリングに行った病院の先生だ。僕がＡＳＤだと診断された小学二年生のとき、ある言葉をかけてくれた。

「それは個性なんだよ。あなただけの大事な個性。その個性を生かして、自分の武器にしちゃえばいい。大事なのは自分の考え方なんだよ。」

この言葉に僕は感銘を受けた。みんなと同じじゃなくてもいいんだ、と思ったとき、ふっと心が軽くなった。

ところで、今活動している人の中にも「個性」を持っている人がいる。米津玄師さんや、草彅剛さん、イチローさんなどもその一人だ。そんな人たちも自分には障害があるということを公表するかどうか悩んだ、と語っていた。そのことを知ったとき、僕は周りの人と違う「個性」を持っていることを公表できるなんてすごいな、とどこか他人事だった。しかし、これは僕にも関係があることだ。僕も、差別されるのは怖い、しかし怖がっているだけでは変わらない、という葛藤をすることもある。しかし僕はまだ周りの人に自分がＡＳＤだということを伝えられていない。それを伝えることができたとき、僕は本当に幸せになれると思う。

人は皆「個性」を持っている。その個性が認められるとき、そして自分の個性を自分自身が認めら

れるようになるとき。それは個性が羽ばたくと表現できると思う。

個性を羽ばたかせるために、僕たちには何ができるか。次はそれを考えていきたい。

奨励賞

高齢者は弱くない

函南町立函南中学校
一年　加藤　壮祐

僕の家には九十四歳のひいおじいちゃんが一緒に住んでいます。おじいちゃんはいつも僕や妹を見て、幸せそうな笑顔で見ます。なので僕は、高齢者の方達は、いつも幸せなイメージしかありませんでしたが、施設での暴力のニュースや、高齢者への虐待はダメ！というポスターなどを見て、こんなにひどいことが世の中で起きているのかと、心配になりました。

人権問題と聞いた時に、おじいちゃんの顔が浮かびました。おじいちゃんは、自分の力でできる事と、食事の支度やお風呂など自分の力のみではできない事があり、家族がサポートしながら生活しています。その他には、デイサービスなども週に3日間施設へ通っています。僕が小学生の時、施設がどんな所なのか、どんな事をして過ごしているのか興味があったのと、その日はおじいちゃんの誕生日だということもあり、母と妹と一緒に施設を見学させてもらいに行きました。その日は、おじいちゃんの誕生日会が開かれていて、おじいちゃんが主役でした。他にもカラオケや、クイズなどもやっていて、とても楽しそうでした。参加することが難しい方もベッドで横になりながら参加したり、車い

すの方もいました。スタッフさんも一緒にギターをひいたり、どの利用者さんにも笑顔で、スタッフさん同士も笑顔で話していました。施設の裏庭には足湯もあり、きれいな花がたくさん咲いていて、みんながリラックスできたり、気分転換ができるようになっていました。施設の方以外の人達も入りに行くことが可能だったので、おじいちゃんと一緒に入りました。おじいちゃんがくつをはこうとすると、すぐにスタッフさんがウォーカーを持って来てサポートしてくれていました。しかし、ただやってあげるのではなく、自分でもはけるように声をかけていました。優しいだけでなく、おじいちゃんが自分でできるように見守ってあげることも大切なのだと感じました。

おじいちゃんのサポートをしてくれる人は他にもいます。家で転んでケガをしないように、気持ち良く生活できるように、つかまる手すりやウォーカーをレンタルしてくれる人もいます。このように、家族だけでなく、たくさんの方や施設によって守られています。

高齢者と聞くと、弱いイメージがあるかもしれません。確かに、自分でできる事も少なくなっていき、動きも遅く、耳も聴こえにくくなります。けれど、おじいちゃんは、長く生きているだけあって、話していると、たくさんの知識を持っていて、色々なことを教えてくれます。詩や日記を書きながら今でも漢字を調べています。いつでも自分にできることはないかと探しながら竹で竹トンボを作ってくれたり、庭の枝をせんていしたりします。そんなおじいちゃんの一生けん命生きている姿から学ぶことがたくさんあり、弱いだけではないと感じます。そんなおじいちゃんにいつも、

「いってらっしゃい！」

など、応援されていると思うと、僕は力がわいてくるような気持ちになれます。高齢者は、人に力を

与えることもできるのです。

僕はおじいちゃんだけでなく、今まで一生けん命生きてきた高齢者の方にも幸せに生活して欲しいと願っています。その為には、家に高齢者がいる人や、身近に高齢者がいる人、施設で働く人たち以外の人も、一人一人が高齢者の方はどんなことを考えているのか、何をして欲しいと思っているのか、考えてみて欲しいです。考えてもわからない時は、会話をしてみて下さい。きっと弱いだけのイメージではなくなるはずです。高齢者の方の持つパワーや生き方をみんなが感じるようになれば、虐待は絶対になくなると信じています。

奨励賞

自分に誇りを

富士市立富士南中学校
三年　永　田　杏　樹

「私はいつになったら肌がみんなみたいになれるの？みんなみたいになりたい。」
私は何回この言葉を母に尋ねただろうか。そしてその度に母が困ったような顔をしていたのを今でも鮮明に覚えている。そんな顔を見た私は察する。
「あぁ、私はみんなみたいになれないのか。」
私は生まれてすぐから幼少期をアメリカ南部で過ごした。白人ももちろん沢山いたけれど、黒人がとても多い州だ。私が通うプリスクールも卒園をする最後の年までは日本人は私一人で、兄が通う小学校には日本人は兄一人だった。私は幸いにもアメリカ生活の中で差別もいじめも受けたことがない。しかし、友人には、
「みんなと違うね。面白い色をしているね。」
そんな風に言われることがあった。先生方は九割が黒人の先生で、友人も黒人の子が多かったので、ただただ羨ましくて仕方がなかった。私もあんな肌の色になりたい。あんな髪の毛の色になりたい。

大きくなったら私もあんな風になれるかも。みんなと一緒がいい。最初こそ、そんな風に本気で考えていたけれど、大きくなるにつれてそれは無理なことだと理解した。そしてそう思う度に悲しくなった。それでもその悲しみを吹き飛ばすくらいの先生方からの愛情と友達との時間のおかげでいつしか、みんなとの違いをあまり気にしなくなった。

しかし、兄は違うようだ。年齢を重ねるごとにみんなとの違いに気づいていく。子供はある意味正直だから、傷つく言葉も言ってしまうときがある。それは時に、人種差別的発言だったりもする。それを強く感じさせられたのは、兄が自分の自画像を描いているときだった。白人の子供は日本でいう、うすだいだい、ペールオレンジのクレヨンを使い、黒人の子供はこげ茶色などを使用して肌を塗っていたのだが、兄は友達から黄色のクレヨンを渡され、それ以外は使わせてもらえなかったことがあったらしい。

「お前はアジア人か？」

「お前の色は黄色だろ。」

そうしつこく馬鹿にしてくるクラスメイトに

「僕は日本人だ！よく覚えておけ！」

と何度も喧嘩していたと母や兄から聞いた。でも担任の先生もその子たちを叱ってくれ、兄を守ってくれる先生だった。だから兄はその後も元気に学校に行くことができた。

人種差別という概念はいつから人の中に根付くのだろうか。アメリカでは今でも人種差別は存在する。

「私には夢がある。」

そう、人種差別撲滅に多大な影響を与えた、キング牧師が繰り返しこの言葉を口にしてから60年あまり、まだ存在するのだ。全員が全員でなくても白人は黒人を差別することがあるし、差別された黒人がアジア人やヒスパニックなどを差別する。生まれたときや幼少期には人種差別なんて考えは存在しない。だが、大きくなるにつれ、人種差別という恐ろしい感覚は備わってしまう。幼児期にはなかった差別的発言が学童期にはしてしまう。それは結局、大人たちの考え方やメディアのあり方、近年だとネットやＳＮＳの普及が大きく関係してきて、それをまた子供たちに植えつけているのではないかと思う。それはアメリカだけの話ではない。日本でも同じようなことが起こっていて社会問題になっている。アジア人も同じアジア人を差別したり、白人や黒人を差別したりもする。同じ人間なのに不思議だ。ヘイトスピーチなどが良い例なのではないだろうか。ある特定の国の人をその人種というだけで全て否定してしまう。逆に日本人も他の国の人から差別的なことを言われたりされたりする記事などもたまにネットで目にしたりする。結局〝自分と違う存在〟を排除したいだけなのではないかと思う。何もしないのは楽で安全なことだ。だから目を瞑りがちになるだろう。でもまずは、目の前の嘘か真かの情報ではなくて、人種差別の背景が何なのか。現在の状況はどうなのか。自分の目と耳で学び、知ることが人種差別をなくす第一歩だと思う。

日本に住む外国人の子供たちの中にも肌色が違うことに悩んで、日本人の肌のようになりたい。そう思っている子がいると聞いた。その気持ちはとてもよく分かる。私はされなかったが、中には自分とは違う肌色を見て馬鹿にしてくる人が少なからずいる。ただでさえ自分の中で気にしているのに人

から言われたりしたら傷つくに決まっている。そして自分に自信をなくしてしまうかもしれない。でもその必要はない。私もアメリカにいたとき、自信をなくした。でもこの言葉に救われた。だから、みんなにも伝えたい。

「〇〇人でいることへの誇りを忘れないで。」

これは日本人だけではなくみんなに忘れないでほしい。自分のありのままの姿に誇りと自信をいつまでも持って生きてほしいと思う。

奨励賞

男女差別に負けない

浜松市立浜名中学校
三年　小　梢　蒼　依

私の住む地域では、毎年お盆の時期に小松祭というお祭りが開催される。ここ三年間、新型コロナウイルス感染症の影響で中止されていたが今年はやるそうだ。私は小学五年生の時にその小松祭でのおはやしのために夏休みに毎晩地域の練習会に参加した。私は大太鼓を担当し、手にマメができるくらい一生懸命練習を頑張った。しかし、小松祭本番は女だからという理由でやってはいけないと言われた。それも本番三日前に。私と一緒に練習していたもう一人の男の子よりも多く練習していたのに最終的に男か女かで出す出さないを決められ今までの練習が水の泡になりとても悔しかった。その場で泣くのを必死になって我慢したことを今になってもはっきりと覚えている。だめだと言った男の人は決して悪意を持っていなかったのかもしれない。今までの常識の中にあるものだろう。けれどそれが本当に当たり前のことなのだろうかと疑問に思った。同時に少し恐ろしいと感じた。

その日の練習が終わった後、家に入り中に上がった。しかし母は家に入っても靴を脱がずに玄関に立っていた。そして母は言った。

「こんなのお母さんも悔しいから、ちょっと話してくる。」
私は冗談ではないぞととても不安で恥ずかしかった。私があまりにも落ち込みすぎたのだろうか。明日から周りの人に冷たい目で見られたらどうしよう。など色々な気持ちが消えてはまた現れての繰り返しだった。うす暗い玄関扉を見つめたまま、時間が刻一刻と過ぎると共に不安や恥ずかしさが増していった。しばらくして母が帰ってきた。前よりも明るい表情だった。そして私に、
「大太鼓、たたけるようになったよ。」
と言った。その後、母が話しに行った時の状況を教えてくれた。母が話した時、近所のお父さんがそれは平等ではないねと言った。そして他のお父さん達もそうだねと同情してくれて私が大太鼓をやってもいいことになったそうだ。このことを聞いて平等ではないと思う人がいて、自分たちの考えは間違ってなかったと分かり少し安心した。しかしまだ心の中のわだかまりは消えなかった。どのお父さんも私の母が言うまでは何も言わなかった。もしあの夜、母が何も話さなかったら多分、私が小松祭で大太鼓をたたかないことに誰も何も言わず何事もなかったかのように終わるだろう。だから、言われなければ気づけず、おかしいなと思っても何も行動を起こせない人が多いのだと思い、それが当たり前になってきてしまっているのが悲しかった。そう考えると母がとても頼もしく感じられた。きっと性別で差別されて悔しい思いをした人は私たち以外にたくさんいる。それを見ている第三者は何も言わずただ傍観しているだけ。差別された人もそれが常識なのだと思い込んでしまい何も言わずに終わってしまう。それが当たり前の社会になってほしくない。昔はそれが当たり前だった。けれど考え方も時代の変化と共に変わっていく。社会の歴史の中で憲法の内容や政治の仕組みが変わっていくよ

うに性別に対する差別も変わっていくはずだ。社会科の授業で歴史を学んでいて今は昔と比べて男女差別は本当に少なくなってきているとよく感じることがある。ただ、まだこうして一部の人が差別されてしまう人がいるのは日本古来の考えだけに絞られ、自分の考えをおし通したいと思う人が多いことも理由の一つに挙げられるだろう。また、その考えは本当に正しいのかと声を上げる人が少ないからだと思う。私の母のように一歩踏み出して意見を上げる人がもっと増えるべきだ。怖くてなかなか踏み出せないかもしれない。だけれど周りにも自分と同じことを思っている人がいる可能性だってある。だからもし、差別されているところを見たり、自分がされたりしたらそのまま終わりにするのではなく、しっかり自分の意見を伝えようと思う。私の名前は男でも女でも使われている。父と母が差別なんかに負けないでたくましく生きてほしいという思いから付けたそうだ。私はそのもらった思いを心に刻み、生活していきたい。

奨励賞

本当の優しさとは何だろう

掛川市立城東中学校
三年　岸　佳澄

「代わりにやってあげようか。」

私が相手に対し、優しさのつもりでかけた言葉が人権について考え直すきっかけになった。看護師の母と介護師の父を持つ私は、小さい頃から命の大切さや平等、思いやりについてよく教えられて育った。小、中学校で児童会本部役員や副部長など何度もリーダーを経験し、人見知りでコミュニケーションをとる事が苦手だった私が困っている人に手を差しのべるようになった。始めは声をかける事が怖かったが感謝される事で人を助ける事は、自分も相手も良い気持ちになる。そう思った。

そんな私の人権に対する考えが変わるきっかけは曽祖母との会話だった。おばあちゃんは、九十九歳で少し前まで散歩が日課で身の回りの生活行動は自分でやり、趣味で裁縫をするなど何でも出来る人だった。今年に入り転ぶことが増え、前より耳が遠くなって会話がうまく成りたたなくなった。ある日おばあちゃんは私にこう言った。

「〇〇ちゃん、それを取っておくれ。」

呼んだのは明らかに妹の名前だった。その日からよく妹達と名前を間違えられるようになった。後日、その日は両親が仕事で、隣の祖父母の家で過ごしていた。祖母が夕食の時間を知らせに部屋に行った時、おばあちゃんはベッドで寝ていた。声をかけて目を覚ましたおばあちゃんは朝だと勘違いしていた。当時、冬で日が沈むのも早かったから寝る時間だと思ったのだろう。小さい頃から毎日会っていたが、この日までこんなことは一度もなかった。すごく驚いた。今まで自分の事を完璧にこなす姿を見ていたからつらかった。そんな事があったから家族は、おばあちゃんの身の回りの事をほとんどするようになった。祖父母は、知識が豊富な私の両親に聞きながら慣れない介護をしていた。施設に入る数日前、私はおばあちゃんの部屋に行った。爪を切っていた。聞いたらもう二時間も前から爪を切っていたらしい。とっさに私は、

「代わりに切ってあげようか。」

と聞いた。返ってきた言葉は意外だった。

「気持ちは嬉しいよ！だけどおばあちゃん自分でやるからいいよ。ありがとう。」

思い返してみると、私はそれまでにもおばあちゃんが家族からの手伝いを断る姿を何度も見た事があった。家族はおばあちゃんを頑固だと感じていたものの、手伝いを断る事に対して私は何も思っていなかった。しかしこの時は、二時間もの時間をかけているのにそれでも自分でやる事にこだわるのはなぜかという疑問をもった。そこでその疑問を尋ねた。私の家族が身の回りの事を気にかけてくれる事に感謝していたが親切によって相手の優しさ以上に辛さを感じていたそうだ。私はあの時優しさで言ったつもりだったが、逆におばあちゃんは自分で出来る事を相手の優しさによって奪われてしまうと捉

えたのだ。それを聞いた時、今まで相手を助けようと思ってやっていた行為によって相手に不快な思いをさせてしまっていたのかもしれない事を知った。私の助けが必要だろうという偏見によって、おばあちゃんは自分で出来る事を全力でやっているのにそれを奪おうとしてしまった。私はおばあちゃんの人権を侵害してしまったのだ。ふと学校生活にも同じような場面があると思った。班長になっている私は班をまとめ、リードしなければいけない立場にある。これまで何度も問題が解き終わっていない班員に、解き方を教える事があった。もしかしたら自力で解き切りたかったのかもしれない。当たり前だったおばあちゃんとの日常生活が私の考えを大きく変えさせてくれた。

人は誰もが自由で平等に生きる権利を持っている。持っている権利は同じでも人それぞれ個性や考え方、捉え方は違う。互いの違いを受け入れて相手を尊重、思いやりを持って生活することが大切だと私はおばあちゃんとの会話を通して感じた。本当の優しさとは何だろう。困っている人に手を差しのべる事だけが優しさではないと思う。時には相手の気持ちを尊重して見守る事も優しさなのではないか。人それぞれ優しさにも捉え方があり、どれも優しさで、必ずしもこれが本当の優しさというものはないと思う。しかし、助けが必要という助ける側の勝手な偏見によって、手を差しのべたつもりでも私の経験のように相手の出来る事を奪ってしまい誰かを傷つけてしまうようならそれは優しさではなく差別であり、人権を侵害してしまっている。相手を尊重した小さな優しさ、助け合いの気持ちを一人一人が持ってコミュニケーションをとれば相手にもその気持ちが伝わりそれが積み重なれば、きっと差別のない笑顔あふれる社会になるだろう。私は、困っている人や悩みを抱えている人達の気持ちを尊重し、手を差しのべられる人になる。そう誓ってこれからを生きていく。

奨励賞

共生社会の実現に向けて

掛川市立東中学校
三年　井　野　　颯

僕の弟は双子で、その内一人が重度身体障害児です。自分の力で立つ事も、一人で座ることもできません。言葉を話す事も、ごはんを食べることも、トイレも、歯みがきも、おふろに入ることも、自分一人では出来ないので、誰かの手を借りなければ生きていけません。もし身体が痛くても、何かつらいことがあっても、「痛いよ、苦しいよ」と自分の言葉にして伝えることができないので、こちらが本人の意志をくみ取らなければならないのです。それをきっかけに、僕は、僕の弟のような障害者の、人権について考えることにしました。

重症の障害者であっても、全ての機能に障害を受けているわけではありません。僕の弟は、耳がしっかりと聞こえていて、嬉しい時は笑顔を作ることができ、悲しい時は涙を流して泣くことができます。何も分かっていない、と決めつけることはできないのです。僕の弟だけではなく、他の重度な障害を抱えている子も、動作で示すことができなくても、周りの人の言うことが分かっていることもあるかもしれません。

こうした障害者の人達は世の中には沢山います。やはり生活をしている中で、周囲からジロジロと偏見の目で見られ、

「恐い、気持ち悪い」

と、本人が傷つくような言葉をかけられ、時には暴言をはかれたりすることもまれにあります。「障害者」という理由で就職できなかったり、暴力を振われたりするなど、様々な人権差別が今でもあるように思います。

元々障害者が差別されるようになったのは、労働の役に立つか、立たないかで、人間を選別するようになったと本に書かれていました。最近では、無差別殺人事件や虐待など少なからず起きていて、よくニュースで耳にします。人々は「障害者」というだけでマイナスの印象をもってさける行動を取ってしまいがちです。障害者が少しでも生きやすい世の中にするために、今僕達には何が出来るのでしょうか。それは障害者の人達への理解を広めていくことだと思います。手足が不自由な人や、片足がない人に、

「どうしてそうなったのですか。」

と、率直に聞くことは失礼なことではないと思います。むしろ、何も聞かずにジロジロ見られる方が辛いのではと僕は思います。その他に、障害者の人でも通える施設や学校、大学を増やし、気軽に勉強や仕事ができる環境を作ることだと思います。

二〇一五年九月二十五日に、国連総会で採択された十七の世界的目標の中に、障害者との関わりがあるものは「人や国の不平等をなくそう」、「住み続けられる町づくりを」など、いくつもの目標があります。障害者についても心身機能の障害だけではなく、環境や周囲の人の偏見などの社会的障壁か

らくる障害もあり、それについても理解することが大切だと思いました。さらに学校の授業やイベントなどを開き、より多くの障害当事者との対話の機会を持ったり、沢山のコミュニケーションの場を設けることが、今後大切になってくると思います。

健康な子が望むようなことは、障害者の人達もみんな望んでいるはずです。変化の少ない毎日をくり返していたり、周りの人がケンカをしてとげとげしていたりすると、こうした子供達は、言葉が言えないだけに、ストレスで下痢をすることがあります。家の中ばかりにいるのではなく、外に出たい、太陽の光を浴びたい、外の風に吹かれたい、プールに入りたい、一人ぼっちではなく、友達と一緒にいたい、楽しい経験をしたい、周りの人のやさしい声や笑顔にふれていたい、みんな、願いは同じです。障害がどんなにつらく、重くても、子供はみんな成長していくし、成長を保障されなければなりません。

差別をなくし障害者の人達が安心安全に暮らすためには、時間と長い年月がかかります。ＳＤＧｓの一つである、公平で平等な社会にするためには、一人一人の障害についての大変さ、苦しさを知ってもらうことだと思います。そして「知る」だけではなく、さりげない気遣いとやさしい心を持ち体が不自由な人達を支えていこうと思いました。

共生社会の実現に向けて、もう一度考え直し、誰もが差別をなくし、協力し合い、認め合える未来になっていけたらいいなと思いました。目に見えないバリア、人の心の中にあるバリアをとりのぞき、障害をもつ人たちと、へだてなく心を通わせていけたらいいなと思います。まずは一歩、最初の一言から歩み出そうではありませんか。

奨励賞

卵から考える共生社会

袋井市立周南中学校
三年　鈴　木　依　子

「人権を守る」ってどういうことだろうと考えた。学校でも人権について学習したが、いまいちよく分からずにいた。考えているうちに、ある出来事を思い出した。私が小学生の時、クラスにブラジルから転校生がやってきたのだが、その子は全く日本語が分からなかったため、誰とも話すことができずクラスで孤立してしまっていた。私はその日、家に帰ると母のスマートフォンで簡単なポルトガル語の挨拶をいくつか調べて紙に書き出し、そして次の日学校でそれを見ながら話しかけた。へたくそなポルトガル語で

「Bomdia.（おはよう）」

と声をかけると、その子は少し驚いたような顔をしたがその後すぐに

「Bomdia!」

と笑顔で返してくれた。それをきっかけに日本人の私でも、ブラジル人の子と徐々に打ち解けることが出来たのだ。

この出来事を母に話すと、
「どうしてポルトガル語を調べようと思ったの。」
と聞かれ、私はとっさに
「仲良くなりたかったから。」
と答えた。すると母は
「〇〇くん（転校生）は嬉しかっただろうねえ。」
と言った。ただ仲良くなりたかったからポルトガル語を調べた。ただ仲良くなりたかったから自分から先に話しかけた。単純な考えで取ったこの行動がその子を救っていたかもしれないと思うと本当に嬉しかった。些細なことだがこれが、「人権を守る」ということかもしれないと今になって思った。

見た目や言語の違いから生まれる差別がある。それはきっと、相手のことを「自分とは違う人」と決めつけてしまうことから始まると思う。そしてコミュニケーションをとることに対して自然と抵抗を持つようになることがある。これは心の奥底に潜む無意識の差別だ。

しかし、小学生の頃は転校生に自ら歩み寄れた私でも、「自分は差別の心がない」とは言い切れない。他の国から来た人を軽蔑するような目で見てしまったこともあったと思う。実際に行動や態度に出なくても、自分の中で差別が生まれてしまったのはとても悲しいことだ。「差別は良くない」といくら頭の中では分かっていても、まずは自分の心の中にある無意識の差別をなくさないといけないと思った。

ある動画を観た。白い殻のゆで卵と茶色い殻のゆで卵の殻をむくと、両方の卵から白いゆで卵が出てきた。「卵と同じように、人は見た目は違っても、中身は同じ」。そう訴えている動画だった。他に

も似たような内容を訴える動画がたくさんあった。私はこの動画を観て、世界には共生の大切さを懸命に伝えようと働きかける人がたくさん、自分が思っていたよりもたくさんいるということに気がつき驚いた。最初は小さかった画面の中の訴えが反響を呼んでだんだん大きくなり、やがて画面を通り抜けて今を生きる全ての人に届く。そして差別をなくしたいと考える人がもっとたくさん増えたら良いと思った。

人が生まれながらに持つ、人が人らしく生きるための権利が人権で、私たちにはそれを守る義務がある。かつて人種差別が珍しくない時代があった。悲惨な歴史を繰り返してやっと人種差別に対する考えが変わっていき人権が守られるようになった。それでも尚、心の奥底に潜む差別はまだなくなってはいない。差別がなくならない主な理由は、差別に対してしっかりと理解を持って行動できている人が少ないからだと思う。

差別とは、その人が悪だと思い込むこと、決めつけること。私たちは「差別はしてはいけない」ということを教えられてきた。あとは「どうして差別をしてはいけないのか」ということをひとりひとりがちゃんと向き合い、理解しそしてその答えに揺るがない自信を持つことが大切だと思う。そのためには「相手を知る」ことが一番効果的な方法ではないかと思う。その人は何をするのが好きなのか、その人の良いところはどこかなどを観察する。相手の文化を尊重し、相手の立場になって考え、思いやりを持って話しかけてみる。こうした働きかけを日常生活で自分が自分でしていけば、本や人の話だけでは見抜けない「差別をしてはいけない理由の本質」が解るだろう。そうして色違いの殻を割って出てきたゆで卵のように、全ての人が平等でどの人も素晴らしいということに気がつくのだろうと思う。

奨励賞

偏見から生まれるもの

森町立旭が丘中学校
三年　村松奈緒

二〇十九年十二月、世界で初めて新型コロナウイルスの感染者が確認されました。その後数か月で新型コロナウイルスによる感染症は、パンデミックと呼ばれる世界的大流行に陥りました。そして日本では、「コロナ差別」が大きな社会問題になりました。感染者やその家族などの濃厚接触者と特定された人を過度に遠ざけたり、医師や看護師の白衣を洗う業者が見つからなかったり、感染者を中傷したりといった行動に出る人が多くいたのです。こうした人権侵害を「コロナ差別」と呼びます。

毎日、新型コロナウイルス感染症に関するニュースが飛び交いました。特に私の心に残っているのは、感染者の自宅に石が投げ込まれたというニュースです。私は、テレビ番組でそのニュースを知り、激しい衝撃を受けました。その頃はまだ、私の周りでは新型コロナウイルス感染症が流行していませんでした。「何故そんなひどいことができるのだろう。病気の人に対してすることじゃない。」と思いました。また、「もしも自分の周りで流行したとしても、絶対に差別はしない。」とも思いました。

しばらくして、私の周りでも、感染者が増えてきました。流行を身近に感じ、自分もいつどこで感

染してしまうかわからないという漠然とした恐怖のようなものを感じながら、休校期間を過ごしていました。そんな時、親友の家族が感染したことを知りました。親友は濃厚接触者になったのです。当時、濃厚接触者は不要不急の外出を控えることが原則でした。

ある週末、私は母と一緒にスーパーマーケットに買い物に行きました。そこで、私は親友を見かけました。私に気付いた親友が手を振ってくれましたが、私は気付かないふりをしました。「コロナが他の人にうつるかもしれないのに、外出するなんて。周りのことをもっと考えてほしい。」と腹立たしく思ったからです。母が、手を振り返さなかった私に、「なんで無視しちゃったの。あの子は、家で過ごすのに必要な物を買いに来たんだと思うよ。家族みんなの食べる物がないときに、買い物に出ちゃいけないの。」

と言いました。

私は母の言葉を聞いて、はっとしました。

「私は今、勝手な思い込みで無視をしてしまった。これは、『コロナ差別』だ。」と私の心は親友に対する申し訳なさや罪悪感でいっぱいになりました。自分は差別しないと決めていたのに、知らず知らず濃厚接触者である親友を疎ましく思い、避けてしまったのです。私は自分を恥ずかしく思いました。自分も感染者の自宅に石を投げた人たちと同じだったことに気付いたからです。「親友に今すぐ謝りたい。」と思い、ＳＮＳでメッセージを送りました。正直な気持ちを打ち明けると、親友は、「うつると思うと怖いよね。大丈夫だよ。」と返信してくれました。「なんて優しいんだろう。」と強く思いました。

私は未知のウイルスによる新たな感染症への戸惑いや、自分の思い込みから差別をしてしまいました。テレビやインターネットからたくさんの情報を手に入れることができる今の社会では、正しい情報が何なのかを識別することが難しいときもあります。また、インターネット上には、誤った情報や無責任な言動があふれています。実際に、新型コロナウイルス感染症の流行した初期は、デマやフェイクニュースがインターネットを騒がせていました。差別は、誤った知識や偏見から生まれるということを、私は身をもって知りました。他にも、ハンセン病やエイズなどの病気の患者やその家族への差別が問題視されています。病気に関連するもの以外でも、障害、年齢、貧富、性別、出身地域など、様々な事柄に対しての差別が存在しています。

差別をなくすためには、どうしたらよいのでしょうか。私は、物事に対して的確な情報を入手し、正しい知識を得ることが何よりも大切だと思います。むやみに情報を鵜呑みにせず、真実を見きわめることが、偏見を減らすことに繋がります。また、自分の言動を反省し、差別をなくそうと一人ひとりが強く決意することが必要です。誰もが笑顔で幸せに暮らすことができる、差別のない世界を一日でも早く実現できることを願って、私はこれからも生活していきたいです。

ひとりで悩まず相談してください。

〈人権相談受付窓口〉

○常設相談所

静岡地方法務局人権擁護課
（静岡市葵区追手町９－５０　TEL０５４－２５４－３５５５）
静岡地方法務局沼津支局
（沼津市杉崎町６－２０　TEL０５５－９２３－１２０１）
静岡地方法務局富士支局
（富士市中央町２－７－７　TEL０５４５－５３－１２００）
静岡地方法務局下田支局
（下田市西本郷２－５－３３　TEL０５５８－２２－０５３４）
静岡地方法務局浜松支局
（浜松市中区中央１－１２－４　TEL０５３－４５４－１３９６）
静岡地方法務局掛川支局
（掛川市亀の甲２－１６－２　TEL０５３７－２２－５５３８）
静岡地方法務局藤枝支局
（藤枝市青木一丁目４－１　TEL０５４－６４１－１１５８）
静岡地方法務局袋井支局
（袋井市袋井３６６　TEL０５３８－４２－３５４５）

※以上の場所では、面接及び電話による人権相談を受付けています。

○電話による常設相談

こどもの人権１１０番＜０１２０－００７－１１０　フリーダイヤル＞
みんなの人権１１０番＜０５７０－００３－１１０＞
女性の人権ホットライン＜０５７０－０７０－８１０＞

○ＬＩＮＥじんけん相談　検索ＩＤ：snsjinkensoudan

○インターネット人権相談

http://www.jinken.go.jp/

インターネット人権相談　検索

人KENまもる君

人権イメージキャラクター

人KENあゆみちゃん

相談受付時間は、土曜・日曜・祝日を除く午前８時30分から午後５時15分までです。
インターネットによる人権相談は24時間受け付けています。
相談は無料で、法務局職員及び人権擁護委員がお受けします。
秘密は守られますので、ご安心ください。

こどもの人権 110 番

ぜろぜろななの　ひゃくとおばん
0120－007－110（全国共通・無料）

インターネット人権相談受付

ＬＩＮＥ じんけん相談

ケータイでも相談できるよ。左のQRコードをバーコードリーダーで読み込んで接続してね。

人権イメージキャラクター
人KEN あゆみちゃん

http://www.jinken.go.jp/

令和五年度後援団体

静岡県教育委員会
静岡県私学協会
静岡新聞社・静岡放送
ＮＨＫ静岡放送局
静岡市教育委員会
浜松市教育委員会
清水エスパルス
ジュビロ磐田
藤枝ＭＹＦＣ
アスルクラロ沼津

令和６年１月印刷
令和６年１月発行
発行者　静岡市葵区追手町９番50号
静　岡　地　方　法　務　局
静岡県人権擁護委員連合会
印刷所　静岡市駿河区中原746番の１
池田屋印刷株式会社

本作文集は、以下のＵＲＬからダウンロード可能です。
ＵＲＬ：https://houmukyoku.moj.go.jp/shizuoka/page000001_01703.html

禁無断転載
本作文集掲載作品の著作権は、コンテスト主催者に帰属しています。
広報紙掲載、学校教材で使用するなどの場合は、下記にご連絡ください。

連絡先　静岡地方法務局人権擁護課（TEL　０５４－２５４－３５５５）

人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

人権イメージキャラクター
人KENまもる君